北海道立北見北斗高等学校ー同窓会会報誌 Vol.6

# 東京とどの実

北海道廳立野付牛中学校
北海道廳立北見中学校
北海道立北見高等学校
北海道立北見北斗高等学校

# 第72回強行遠足開催！

## 伝統いまだ ここに生きる！

### 男子72キロ 女子41.2キロ 粘った！走った！ふんばった！

北見北斗高伝統・第72回「強行遠足」

北見北斗高校の伝統行事、強行遠足が3日、行われた。校舎前を出発し、男子389人は置戸町間の72キロ、女子341人は訓子府町間の41・2キロに挑んだ。男子は新田良介さん(2年)、女子は松井香織さん(3年)が制した。

強行遠足は生徒の体力の向上、不撓(とう)不屈の精神の高揚と友情を培うことなどが目的。今年で72回目となる。生徒は夏から練習を重ね、体力と気力を高めてきた。

男子は午前4時、女子は同5時とまだ薄暗い中、スタート。沿道の父母らの声援を受けながら、ひたすら自分と向き合ってゴールをめざし、「粘り」「頑張り」「ふんばり」といった〝北斗スピリット〟を発揮した。(真)

### うれしい、やったぁ！男女トップ喜びのコメント

●新田良介さん(タイム5時間42分14秒)＝最初から陸上部について行こうと決めていた。タイムは4位だった去年より1時間、早い。全力以上の成果、うれしい！」

●松井香織さん(同3時間10分51秒)＝最後の強行遠足、目標の1位を達成できました。ずっと楽しんで走ることができました。やった―！」

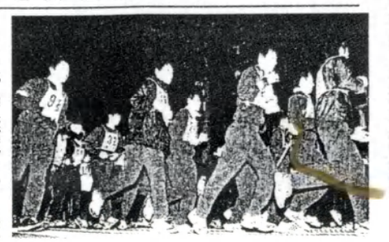
### 北見北斗高が強行遠足を実施

## 過酷な道のり踏破！ ゴールで生徒うれし泣き

【網走発】北見北斗高校(橋本定彦校長)はこのほど、第七十二回強行遠足を実施＝写真＝。参加した生徒たちは、過酷な道のりを踏破することでたくましい心を育んだ。

強行遠足は、体力増進と強い意思を育むことなどを目的に昭和七年から実施している同校伝統行事。

当日は、生徒七百三十人が参加した。男子は七十二キロ、女子四十一・二キロと過酷な道のり。夜明け前に出発した一行は、置戸方面に向かってひたすら歩き続けた。汗を流し、歩き続けること十二時間、六百五十二人がゴールした。ゴール後、うれしさのあまり泣き出す生徒も。



また、中継ポイントでは、保護者が協力に駆けつけ、交通整理、救護・医療活動を行い、生徒を支援した。

活動を見守っていた同校の佐々木淳一教頭は「総勢五百人の保護者や地域の人々が協力してくれている。これは学校が信頼されている証。今後も信頼に応えていきたい」と意欲を語っていた。

完走者におくられた記念のバッジ

# 「東京とどの実会」54周年の集い

2004年6月5日(土)
於/グランドアーク半蔵門

第54回東京とどの実会の集いは、昨年同様早く開催されたため梅雨の影響もなく、新緑の皇居を背景に6月5日土曜日午後1時から、グランドアーク半蔵門で開催されました。「郷里に思いを馳せる時の"母校"の位置づけは、自我のスタート地点でもあったのではないでしょうか。"同級生"であることの親しみと安心感の中で、世代を超えた豊かな情報交換の場として、生かしていただけたら幸いです。」と1,500名の会員に呼びかけたところ、410名の同窓生から返事があり、126名が集いました

(北見から参加の佐々木さんを囲んで桂名誉会長と宮井会長)

(司会)
司会は46期の福井尚登君と56期の吉見(島田)じゅりさんが担当。

(受付風景)

**(宮井会長の挨拶)**
「母校を同じくする者の集いに、幅広い年代の皆様が飲み、食べ、語り楽しまれるよう希望します。」、そして故郷北見の何十年振りの大雪にふれるとともに、母校の卒業生の進学進路、新入生の減少を話されました。そして8年振りに東京とどの実会の会員名簿を簡単な形で発行したい由を説明されました。

(41期小櫻陽一君作詞・作曲「北見のひとよ」)
56期吉見じゅりさんが歌う

(田中みき)
40期服部耕治君が歌手田中みきさんを披露

(乾杯)
34期金森利通副会長

(応援歌)
28期加賀屋勝見さん・33期横山公三さん
34期馬場正孝さん・44期工藤砂和子さんの音頭で応援歌斉唱

(絵本の販売)
40期長谷川知子さんがコーナーで絵本の販売

(談笑風景)

(ミニ強行遠足)
恒例の皇居一周ミニ強行遠足は、15名が参加一汗を流しましたが、メダルの授与・時間帯等、参加者を増やす努力が必要と感じています。

(中締め)
43期作田英二君

**編集部　後記**

曾孫！孫！子供！後輩になるのでしょうか、若さ溢れる在校生の写真をご覧下さい。

"強行遠足"、みなさん色々な思いがよみがえって来ませんか？

併せて、林さんの文章もお読み下さい。そして、東京とどの実会を継続させるために、様々なご意見をお寄せ下さい、つないでまいります。

今年の"集い"は、6月11日(土)です、まだ、来られていない方、都合をつけて、一度おいで下さい、新しい発見があるかもしれませんよ。
お待ちしています。

東京とどの実会　幹事長
37期半田　護

**物故者**

◆平成16年4月28日以降通知

第06回・7年卒　塩沢　悌二郎
第14回・15年卒　織田　繁
第16回・17年卒　小堀　春司
第22回・22年卒　布施　隆治
第25回・25年卒　小亀　宏
第26回・26年卒　笹森　茂
第32回・32年卒　井浦　重則

# 先輩紹介

48期　伊藤彰規

小樽で生まれ、北見市立西小学校(5年から)、光西中学校、北見北斗高校卒業、多摩美術大学油絵科進学、卒業後は養護学校の職員をしながら、アクリルをベースにパステルや油彩、木炭など多彩な画材を組み合わせた「ミックスメディア」と呼ばれる手法の抽象画作品を手がける。2003年9月から200日間、文化庁「平成15年度新進芸術家海外留学生」で、パリの私立美術専門学校へ留学。北海道新聞に連載された伊藤彰規のフランス滞在記より抜粋。

飛行機が次第に高度を下げて、パリ近郊のシャルル・ド・ゴール空港に近づいて来ました。もうすぐ着陸です。窓の下にはなだらかな丘陵に、緑やこげ茶色の四角い畑が広がっています。黄土色に見えたのはきっと麦畑でしょう景色を見ながら、北見での展覧会のために女満別空港に戻ってきたような錯覚に陥りました。

実は、高校一年生の時、図書館でゴッホの画集を見た私は、そこに載っているフランスの風景を「これは、北見ではないか」と勘違いしました。絵の中の空の色や麦畑の黄土色、グレーを帯びた緑などが、普段見慣れている北見の風景と、とてもよく似ていたからです。

中略

あれから三十年。風の音の響きには、はるか大陸の広がりを感じます。ちょうど北見の空のかなたにオホーツクを感じるように。パリの快晴といったら、北見と同じくらい青い空です。空気が乾いて澄んでいるので青色が濃い。美術館で見るモネの空の色がそのまま頭上に広がっています。

中略

初めてなのに懐かしい街。こんな不思議な気持ちを抱いて、パリの生活が始まりました。

明け方と日暮れ時の二回、歌うように鳴く黒ツグミの澄んだ声が聞えてきます。黒ウタドリとも呼ばれるこの鳥のきれいな声が聞こえ始めると、パリの人たちは近づく春を実感するそうです。

中略

いろいろな場面でフランスというくに国の「文化力」の広がりと深さに感心する一方、晴れ渡る空の青さや街中のポプラ、郊外のシラカバ林にどこか北見に似た懐かしさをいつも抱いていました。

私が北見で過ごした時間は、今から四十年も昔の少年時代です。しかし、その間に、オホーツクの風土は私の心の内に決定的な印象を残しました。奥に冷たさをたたえた深く青い空、北のかなたから吹きつける風の音、落葉松の林を凍らせる冬の朝の空気、街路灯の光の輪の中をよぎって降り続ける夜の雪…。これまで抽象絵画で表現しようとしてきた、言葉にできない多くのものを、私は記憶の中の北見のイメージをよりどころとして描いてきました。

中略

パリ滞在は、同時に私の内なる故郷北見との再会の旅でもあったのです。

空は澄みきった快晴。それは昨年初めてシャルル・ド・ゴール空港に降り立った時と同じ、雲ひとつない青空でした。

## 「NHKにこんな人がいた」

NHK旧友会報H14.5.25より

27期　米田　圭二(昭和63年逝去)

長期政権を続けた中曽根首相は、後継候補の宮沢喜一、安倍晋太郎、竹下登の三氏のうち、なぜ竹下氏を指名したのか。密着取材した故米田圭二君が、その著の中でリアルにそのことを明かしている。

それぞれの個別会談の折、竹下氏は次のようなやりとりで首相の心を捉えた。

「外交は全面的に御指導願います。中曽根派から外相を誰に、また新人三人は誰を、党三役の一人も」といった約束、そして「三候補がそろって首相に白紙一任するよう取り運びます」と明言した。さらに竹下氏は国家緊急の事態があれば、中曽根首相にあと半年でも一年でもその職にとどまって頂いてもよい」と述べている。天皇のご病状についてのことであった。もう一つ活字にはしていないが、中曽根氏が構想していた国家戦略の研究所の設立も約束している。いずれも十分に心を捉えたに違いない。

類著ある中で、また放送記者出身の手になるもので、このような迫真の場面を描いた著作を私は知らない。米田君の遺した「ニュースの読み方だ。これは取材のノウハウではない。彼は表の出来事のニュースだけではなく、裏にどのような事実があるのか、情報をどう読むのかを懸命に追求してきたのだ。それには、なにより取材対象との深い信頼関係が確立されていなければならない。

米田君は昭和六十三年、五十五歳の若さで惜しまれて世を去ったが、在局三十年を二分して、記者と解説委員を「天職」とした。かねてから彼は、中国の古言に言う、"男子一生の仕事の一つ、一書を草す"を念願して材料を貯えていたが、体調の異変に気づかされたのは死の二年前であった。入退院を繰り返しながらワープロを打ち続けた彼は、そのあとがきにこう書いている。「自分の人生の最後にあたって、私がニュースに関わってきた関わり方を文章にしておきたかった。卒業論文というにははずかしい出来ばえだが、これ以上は体力が許さない」と述べ、さらに仕事を助けてくれた友人に感謝の言葉を捧げて、すべて終ったのが八月一日。友人が急がせた初校のゲラ刷りを文藝春秋社まで取りに行き、国立ガンセンターのベッドに届けたのが翌二日。米田君は伏したまま両手で受け取るや、声をあげて男泣きに泣いたという。そして八月七日、彼はこの世に別れを告げた。

米田君は、「死んだように生きるよりは、死んだ方がましだ」という、古代ローマの哲学者セロカの言が好きで、最後に「少なくともこれまでは、死んだようには生きなかったことを、心密かに喜んでいる」とも記している。

道産子である米田君は、歯切れ良く語り大声で笑い、酒が入ると『北帰行』を朗々とまた嫋嫋と歌って、眼鏡をはずすのであった。

惜しむべし…。

(NHK元解説委員　家城　啓一郎さん)

# 思い出

## 北大講座「少年兵」から学生同盟を思い出す

(1991年　10月15日付　びほろ図書館だより)

26期　松岡　秀聖

中秋のお月さんを見ながら家路についた。「少年兵と教育」についての講座を思いだし、終戦の歳に中学へ入学した頃を振り返る。

「引揚者の方はいませんか」戦後数年間のこと。遠軽駅で方向転換した網走行きの終列車が、発車して間もなく、車内に大声をあげて尋ね歩く学生がいた。

外地からの旅人は、うつろな瞳をあけて、出発地や行先、家族のことを話す。客車毎に乗車リストを作る。生田原駅に停車する間に、鉄道電話で北見の詰所に伝える。

北見では網走郡・斜里郡・常呂郡など各地に情報を流す。

夜遅く北見駅に列車が着く。肉親との再会にむせぶ人・お茶を飲みながら出迎えを待つ人・連絡がつかない人や接続列車がなくて思案する人など様々である。

結局、北見に一泊となる人達は学生が引く荷車のあとについて、老人、子供一団となり、駅前広場の砂利道を一歩一歩踏みしめつつ、夜霧の彼方へと去って行く。

毎日交替で、旅人の世話をする「学生同盟」という奉仕グループである。北見高等女学校と北見中学の人達、今は還暦の年頃。

当時の話を、その後聞いたこともない。でも、どこかに記憶が残っていないかみたいと思う。あの夜汽車で話しかけた人達、親子は今も健在だろうか…。

## 強行遠足の思い出

25期　林　忠生

昭和23年10月1日午前4時、われわれ在校生800人は暗闇の大通りを歓声を挙げながら西へ走りだした。北見駅前からスタートし、訓子府・置戸・秋田・留辺蕊・相ノ内などの関門を通る全長72.3キロのコースだった。夜が明ける頃から僕は徐々にスピードを上げ、置戸30位台、そして秋田の関門では10位になっていた。関門を出てほどなく2人を抜き8位になったがそれから先には人影が全く見えなかった。僕はさらにスピードを上げようやく留辺蕊の中間辺りで前を走る者に追いついた。一気に追い抜こうと彼をチラッと見ると手で片腹を抑えている。咄嗟にスピードを落とし「大丈夫か」と声をかけた。「はい」と答える彼の声には元気がなかった。次の関門までまだ遠い。どうしようか。しかし、僕には人の姿が全く見えない山道にこのまま腹痛の下級生一人を置き去りにすることは出来なかった。彼が復調するまでたとえ追い抜かれても彼の側に付いて行こうと心に決めた。しかし留辺蕊の関門で一休みした後、彼は相ノ内に近づくにつれて元気を取り戻し、僕の体一つ前を走るようになった。ところが今度は僕のスピードが上がらなくなってしまった。山道で急激にスピードを落としたための反動か、あるいは疲労がたまってきたのかわからない。僕は彼に「先に行くように」と云ったが、「(先輩)先に行ってください」と云ってスピードを上げる気配がない。僕はやっとの思いで彼に並んだ。車相ノ内あたりから僕にもスピードが戻ってきた。僕は彼に話かけた「秋田の山道からここまで来たんだから一緒にゴールしよう」僕には彼が頷いたかに思えた。こうして北見の市街地に入って来た。当時、りんご園の人達が走って来るわれわれにりんごを2個ずつ手渡してくれながら「もうすぐだよ、頑張って!」と元気づけてくれた。もらったりんごは北見に戻って来た証のようなものだった。二人はりんごを両手に握り締め北見駅前に戻って来た。大会本部のテントが大通りに沿って広場の東の端につくられ、その前にゴールの白い線が引かれていた。僕は彼に「サァ行こう」と声をかけ肩を並べてゴールに向かった。ところがゴールライン目前で隣の彼が消えた。僕はゴールして振り返った。彼はゴールラインまでの数メートルを歩いて入って来た。彼が僕に着順を譲ったんだと感じた。同タイムながら着順は7位と8位に分かれた。彼の名がゴールしてから一級下の「三羽伸佳君」であることを知った。

それから僕は一年後の強行遠足では3位以内のゴールを目指してトレーニングに励んだ。ところが心待ちにしていた強行遠足の数日後に行なわれる全道高校駅伝競走(札幌・岩見沢往復8区間92キロ)への出場が決まった。われわれ駅伝出場選手は強行遠足を諦めざるを得なくなった。僕の強行遠足は2年の時で終わった。全道高校駅伝競走はわれわれ北見高が2位に200メートル近い大差をつけて優勝した。チームワークの勝利だった。一方、三羽君はその年の強行遠足で3位に入った。もし、僕が強行遠足で走っていたら三羽君といい勝負になったに違いないと今でも思う。

あれから五十余年、三羽君とは一度も会っていない。

ピアソン記念館

2004年(平成16年)9月29日(水曜日)

下宿生見守り33年 立田さんが寄付金

## 北見北斗高が立田文庫開設

### 井上靖全集など250冊

北見北斗高(橋本定彦校長)は、三月まで三十三年間にわたり北見市内で下宿「玉水苑」を営んでいた立田一枝さん(六)の寄付金で図書室に「立田一枝文庫」を新設し、二十八日、記念式典を開いてお披露目した。(高石和美)

立田さんは一九七一年、廃業まで下宿を始め、つばいにあふれ、立田さんの宝物だ。「生徒が私に計二百二十人の北斗高の支えになっていた。その恩返しに」と二月、同校に図書購入費として百万円を寄付した。

書籍は本清張作品全三十六巻、井上靖全集全二十八巻など、立田さんの希望を取り入れ文学作品を中心に約二百五十冊を購入し、式典終了後から貸し出しを開始した。

式典では立田さんに、図書局の稲垣美香局長(二年)が「たくさんの人に利用されるよう大切に読みます」と感謝の言葉を述べた。立田さんは「中学を卒業したばかりの幼顔が三年で娘らしく、男の子はりりしく旅立って行ったのが何より印象深い」と思い出を語っていた。

お披露目された文庫を囲む立田さんと図書局員

## 「母」の思い 本で触れて

## 昨年の返信葉書から

会報は続けて下さい、楽しみです。
古い人が少なく淋しいです、仕方ないかもね。
28期　和田　淳子

北見市と北斗高校の現状をもっと知りたいとおもいます。
31期　植村　友子

年代別とどの実会の企画
56期 鈴木　俊文

余り出席出来ない方が多いけれど、この季節になると心待ちいたします、感謝の気持ちで一杯です。
32期　川原　静江

皇居一周ミニ強行遠足はよい企画、どうぞ続けてください。年齢等を問わず気軽に参加出来る事を希望します。
40期　寺前　泰彦

地方北見に帰るツアーもくんで下さい。
36期　稲葉　大陸

今までにない新しい企画会合を(例)時代とともに北斗の歴史の展示
33期横山　公三

総会御案内、会報Vol.5ありがとうございました。役員ご一同のご苦労に敬意を表します。
会の益々のご発展をひたすら祈り上げます。会報に発行所・半田幹事長の氏名を記載しておいて欲しいと思います。
25期　島田　俊郎

今回は出席できませんが、総会(パーティ)では知らん人ばかりでつまらないので、是非、ネームプレート(卒期含む)を使って欲しい。
33期　福岡　義隆

夫の転勤で大阪にきて2年です。花園ラクビー場はすぐちかくです。韓国語と習字をはじめました。ちょっとおそい五十の手習い?北斗のお習字の先生"すだれ"が祖父のしりあいだったのをおぼえています。先生のお名前は記憶にありません。御盛会をおいのりいたします。
41期　重森　菜穂子

当番の人達が舞台で全員近況報告等、何か披露する機会があってもよいのでは(毎回)　32期　新飯田　治男

ゴルフコンペ
48期　中田　雄三

第25期生・同期会横浜で5月17日～18日開催し、18日～19日は浜名湖・花博見学と頑張っております(35名参加)一応報告させて戴きます。
25期　野原　昭一